

■□ 報告VI

大阪から岩手県への復興支援・応援が
続けられた理由



林 輝泰 (生活協同組合おおさかパルコープ)

おおさかパルコープの林と申します。私は、岩手県遠野市に約7年間常駐させてもらった立場から、皆さんが報告された現地での支援ということの逆の報告になります。おおさかパルコープは、大阪府下全体の世帯数でいうと約4割のエリアで活動する地域購入生協です。私からは、3点、まずは後方支援拠点があってこそというお話、2つ目がボランティアですね。組合員の参加があり、それが広報活動へとつながったことを報告したいと思います。最後に、現地でNPOが果たした役割をお話します。

阪神淡路大震災の直接被害はエリア的には少なかったのですが、コープこうべさんの後方支援基地の経験をさせてもらいました。発災直後の東日本大震災のテレビ映像等を見て、これはただごとではないということで、トップがまず判断して、「長期の支援が必要になる、募金とか物資支援と並行して、ボランティアするにしても活動拠点が必要だ」となり、岩手県内あちこちを探して、お米の取引先でもありました「遠野」と出会うことができました。災害地がどういう状況かなかなか分からない中で、まずは職員ですね、関西3生協と書かせてもらっていますが、近隣のならコープさん、大阪のよどがわ市民生協さん、パルコープ、その3つが1つのかたまりになって、当時できたばかりの「遠野まごころネット」というボランティア団体に入らせてもらいました。

具体的にどんな活動をしたかですが、職



スライド2

今、映っている画像(スライド2)が、私たちおおさかパルコープの機関紙「ぱるタイム」です。普通は月1回の発行ですが、震災直後から毎週発行の臨時号というかたちで組合員さんにお知らせをしました。ここでは、震災直後ですので緊急募金の取り組みと物資支援の呼びかけを載せています。具体的な活動の中身ですが、私たちは



スライド4

員の大半が共同購入の経験者でトラックの運転ができるということで、遠野まごころネットのなかの物資班に所属しまして、画面（スライド4）ちょっと見づらいと思うのですが手書きの文字がありますが、これは一軒ずつ、現地のおうちに訪問をして、働いている方（収入の有無）がいらっしゃるのか、家族がどういう構成なのか、今何に困っておられるのか、何が必要なのかというニーズ表ですね。これを手書きで書いて、実際に回って行ったなかで必要とされるものについては、その地域に次に回るときにはお届けをしました。スライド4の右側の写真が遠野にあった物資倉庫で、それからトラックが2台映っていますが、パルコープが持ち込んだトラックと、九州のグリーンコープさんに持ち込んでいただいたトラック合計4台で、物が多いときはこういう荷姿で届けて、最初は避難所に行って、また戻ってからニーズ表を整理するということを行っておりました。最初は手書きでしたけど、途中からパソコンも使って入力をする、そういうことの繰り返しでした。

遠野まごころネットは、ハードのがれき撤去だけではなく、非常に多様な活動をしておられまして、よくなされた足湯とか、写真の修復とか、子どもの支援もありまし

たけれど、真ん中に映っている（スライド5の右側）のが「ほっと・ひといき」という取り組みです。被災地の方々がある程度人数まとまっていたら、マイクロバスで遠野のお風呂に来ていただいて、ご飯も温かいものを食べていただいて、お昼寝をして帰って下さいという、ほっとひといきの時間づくりですね。これも5月9日からスタートしていました。そういう遠野まごころネットの多様な活動があって、私たちもいろいろな活動ができたのですが、ボランティアに入れば必ず宿舎もいますし、お風呂もいますし、それから食事もいるということで、遠野市行政の方々、それから住民の方にも協力いただいて活動を支援していただいたわけです。私も7年間遠野で活動ができたのは、やっぱりこういう遠野の受け入れ体制があったからこそだと思っております。

— ハードもソフトも、多様な支援活動 —



**ソフト活動: 「足湯」や「写真修復」、「子ども支援」など
その都度、現地ニーズから**




スライド5

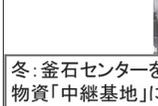
— いわて生協さんと連携して物資支援活動 —



夏: 再開した共同購入の商品を仮設住宅へお届け →



冬: 釜石センターを物資「中継基地」に



冬: 灯油支援は地域のGSと生協が一緒に

スライド7

いわて生協さんとも連携をしました。先ほど、みやぎ生協さんのほうからも報告がありましたように、いわて生協さんも内陸の組合員さんが沿岸部に行って、サロン活動などをされて、そこで一緒に活動させてもらったこととか、あと遠野まごころネットが釜石と大船渡の配送センターで共同購入の法人班（スライド7）をつくって、そ



スライド 8

の商品をお届けさせてもらったりしました。

2つ目の大きなキーワードですが、組合員参加と広報活動ということで、組合員さんのほうは2012年から2017年まで、回数で言えば確か69回だったと思うのですが、大阪から弾丸バスツアーというか、バスボランティアということで、車中2泊、現地1泊のボランティアを企画できました。先ほどの3つの生協で約2,900名の組合員さんとその家族ですね、お子さんは小学5年生以上ならOKでしたし、男性組合員さんの参加も多くおられました。変化するニーズに沿って、いわて生協さんの活動に合流もさせていただきました。これははるタイムの今年2月号（スライド8の右半分）ですけれども、2012年から17年までは組合員さんがボランティアに行かれていた感想が掲載され、次の募集（同左半分）がこうですというかたちで広がりましたし、この号で復興応援コーナーは最後になったんですけれども、2018年からは「岩手からの復興便り」ということで現地からのメッセージをいただいたりしました。そういう組合員さんの参加と機関紙を通じた広報活動のつながりが非常に大事だったと思います。

最後に、岩手県の沿岸部遠野との関係を協同組合というよりはNPOの活動を通して気づいたこと（スライド9）です。遠野

NPOの果たした役割ー公助と共助

■連携と分担(各々の強み・弱みから)

事例①・・・避難所での毛布配布
事例②・・・公的避難所と私設(在宅)避難所

被災自治体 ⇄ 被災住民 ⇄ 後方支援自治体

⇄ 遠野まごころネット

⇒ 考え方・・・公平・平等性(平常時と非常時)

スライド 9

まごころネットは、公的な避難所は行政とか自衛隊の支援がありますので、私設といえますか、在宅で結構山奥を含めて避難されている方がいらっしゃったので、そこに物資を届けようという取り組みをしました。そこはやっぱり、公的な支援と、NPOとしての独自のやり方が違って良いと思いました。困っている人がいれば、そのおうちのところに物資を届ける場合、数が足りなくても、まず目の前の欲しい方に届けるというかたちの支援の仕方をされていきました。そして、遠野市とNPO 遠野まごころネットという団体が協力できていたというのは、すごく大きな特徴だったかなと思います。そういうことがあって、今回、支援を大阪から続けられたと思います。先ほど言った組合員さんの参加が広報活動を含めて連携しながらやれて、よどがわ生協さん、ならコープさんとも一緒にやれたのが大きな力になったと思います。持ち時間が過ぎましたので、以上で報告を終わります。